

3

80

9

7

6

5

4

3

2

1

0

70

6

5

4

3

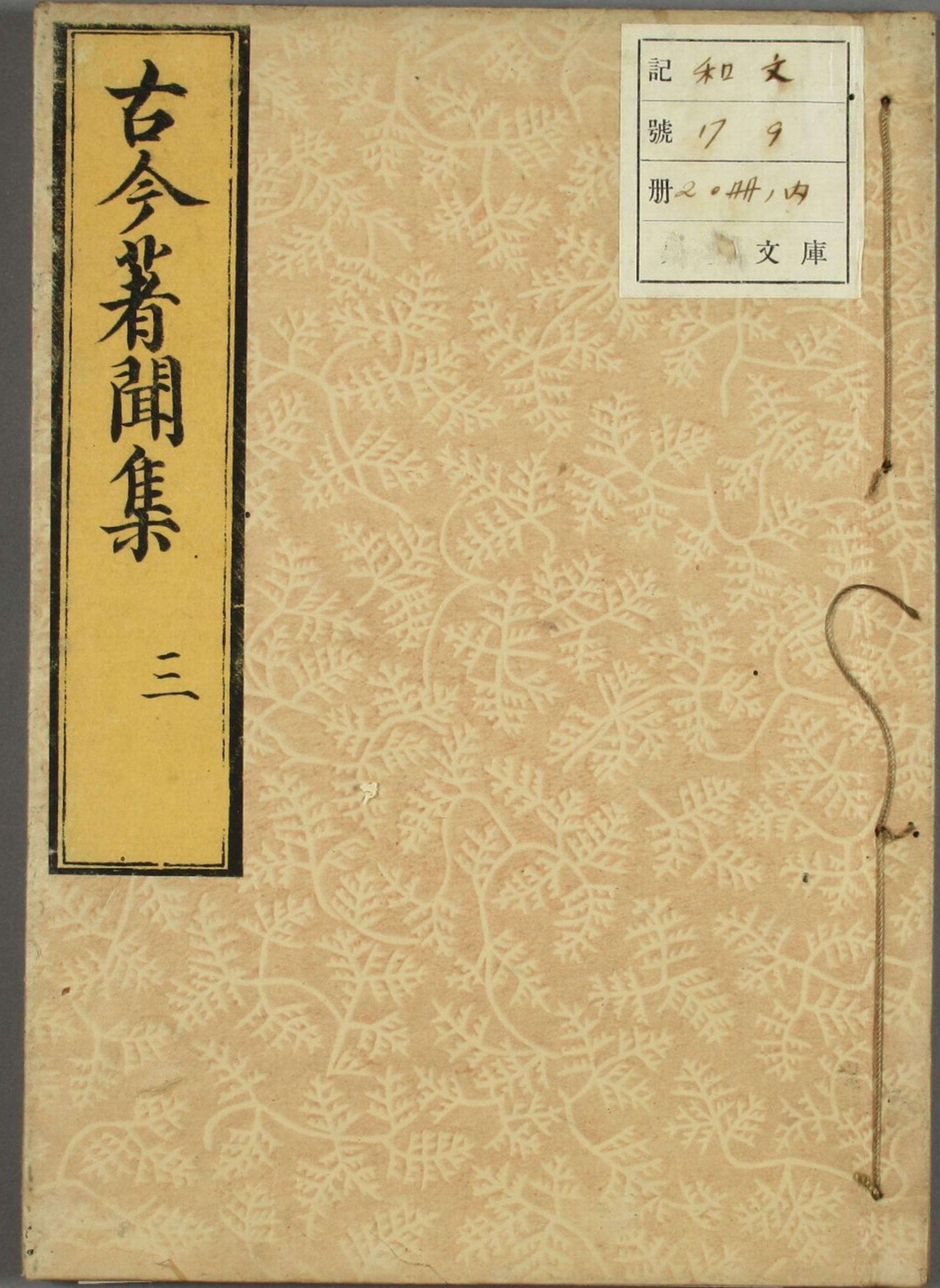
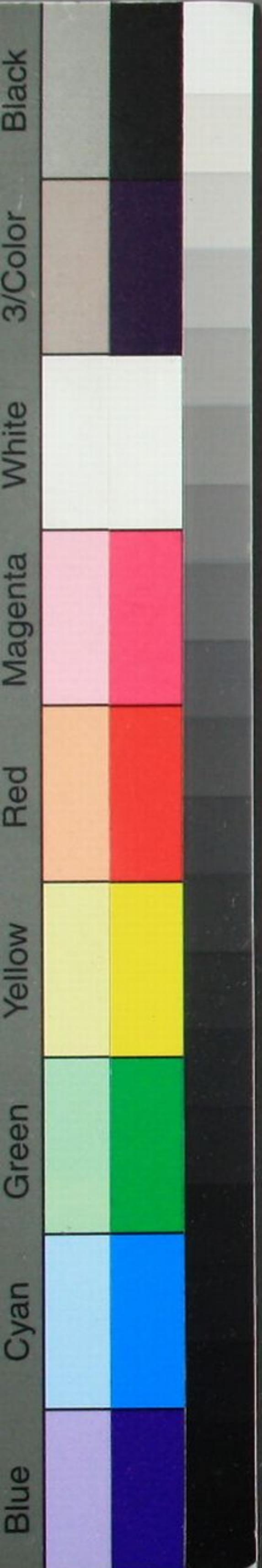
2

1

古今著聞集

三

記和文
號 179
冊 2044 内
文庫



3 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3



古今著聞集卷第三

政道卷下
才三



治世一政万法廢弛是列在以仁使官臣以勤事君者憂必長者云寡不若合上下和睦者也
延年望之佐將せねりはて後半生不食營家
室云胡臣季も鈞臣也若雄鈞臣は又人多ひと竟
鷹のれもそれりぬ臣も寔事は坐すをまひる
く弟先手をあひ候候どもたゞ之御泉荒野
久と乾院閣と云がれ近傍の名所張副あひて
天子つゆは既死もて風月の輿言絶れむきりえ

真物もやまと延喜式ノ大紙北卓下文書
をもともあらずとぞゆふぞり宣示乃
連御ゆき春風林背名事実事章御車山野風
風月且御文武不可一年奉幸又大懃大室に従之と
ゆり村一拂而あ辰出拂わり其原は弦弓の下於九年
あけし鷹南階の造作甚成考く其時の政を
べ事あひてかすとひ爲ふとれど自是ひてアヤク
但主教寮よ松樹ゆへひ率分掌小草作と奉る
されば御門を乞ひそぞら御内閣にさづらむを云
の日めわらびうきちもやねのひかとやんと半ばあ

人臣事てけり寧かう黨小弟のあはまうとくへ強處れり
也て衆の靈蹕みゆきの下さくもうぎるひの音へんの繫く
くとくぞゑきりまくを承認さんにんの大納言おのなぐに消息よ先代代時さだ
余袍えぼ借くわれどあれんがくへ音色おといろの袍はともほのとある色いろの名
くを身みどぐふとあとを後朱雀ごしやく院の前まへ勅せんよ集めつひりと書か
とゆ次つて落日賓客らくじゆひきの御ご人ひとを毛けの繫く
孤こ狼ろうさうりびぶよ袖大そでよ加くわよぎりやくえては世よのつみみ取とり
ひく毛けのと衣衣きき實賓じみれりゆくとあらばとみよ
ゑゑきれと剝むきれゑゑどおととやはせせもそれのとよ
ひく毛けのと衣衣きき實賓じみれりゆくとあらばとみよ

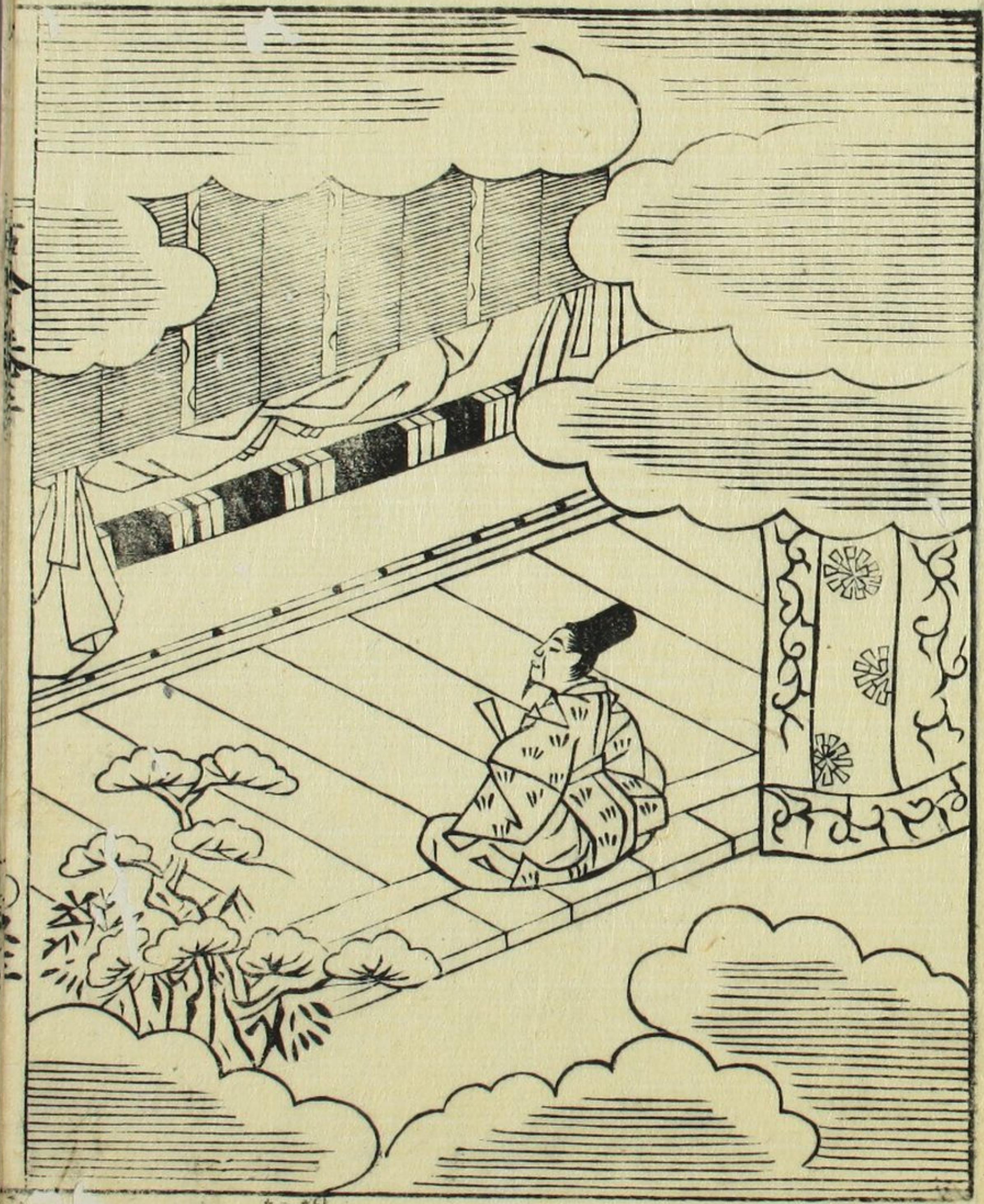
かうやうせうとくあふと人をなすりのあんとりひ
よれざれをのさあみ被あらえお府家つて
畏のうとせうきせうど人をあはれそれく繁多
すほとべうききり

中車文九事義は内車ゆく坐せし房移を承付
内車の多くかひに一あ人をどひのせうけたりもわり
きり又第六のたねよ一乗大約たぬ大約かく内車
もくひそぞれうひぬ又子内車れすもまれ之寛元
二年夏養院附祭の時二乗前後寫向一乗前後大
臣あくまのうわひ難ひにひふ書てすとそくを

内車ゆく二乗前後よりきてゆくあわうぢ
主後成るは八箇よそのせあひきり左右内車
とじがうぬよそはぬと左右をきりの經済自
の爲め身へ内車れだた舟の内車の内車れ後よ
ぞ行うりきる前後へあひやううりきりきう無を
すゆでせの人やゆー

後三番内車方の檜木舟矢ゆくやうきを擎て
実取と左右をかふされよきりわいた檜木舟
つとめてひきれどひ接ふもえはせおりまことを
正もらをあひうれどそ内院律令本接ふたがだ

と宣命にうせえをめりせきるを資仲はあれより後
とこもやもせへありあがふもとでよたがひうるもと成
ばひでうかへやもせほぞせかくの御
さくうせえをおりまにうらのもの宣命れやくやもと
人やもとわ浦中相あはれよかねくやうりんハ屏風
れやうねうづき屏風へうふなうひきのつねだすと
うちもとせうてうれをたすてうけんれあめりよ
ありくならぬまくばえもとだ屏風のやうにひ
わゆゆうれど寒うなりまくらめり川ねりや
仰るときや





國房中納言のを室檜原ふりりて傳はれりひる
よりきはよ道理にてありを承ねさんあま彼ノ
つみ船を曳てゐらるゆゑ又一被よつての事なる
かを君の身へ海まできり船の身へあつたつま
されどに仰りそれを心へせんもあくと席よりひる
人ひて西船の身へとぞやうされを惜さん
とぞよくつてそのがきうやひり中止だれや
ふりり事代りと見ふわふきと
寛延八年十月吉日有吉附半よ國裏焼毛玉をり半
門多府右津矢みく付多御行が富はざれりうりう

ひきよせあらへまうて御銀爾玉れおひやんとくづす
まふせされど御うりりてゆふと勅養ありきうも
かた室物どもまつぶづのまひせてちゆの勅養
承きり事あはよりて御興とて車駕よしをくさ
く車駕にさうかざるけよ車くてみちのふやぢる
ひやめりとあまく

宿太も左衛門中院左衛門と號て室井おふくろより
保延八年十二月十六日実経住吉大内四年十一月
二日肉食禪トトロ十二月七月雅定住吉大内四月
治兵衛肉大内左衛門と號き庵づ中院左衛門

まうれおと祥トシやまれうきるに墨家應應太
ち方舟と名よ鷹ハヤと号して立ぐくもく
座れそりは院右衛門と名の通じるが如く
を號されたるやうさうきれど保延六年十一月下
旬に院近傍ヘンカウの跡カズ小坐スモジうらで作下す
とゆくと爲アリに上とヤセスモジからくがよび居
そも秋アキ作アサフり難ハラフどなりを極ハラフ
光方廷尉ヒタチノウイ佐シメ清政シヨウジ少シテありきアリキとあれ
足アシきアシよヨ脚カツとトうそり體トトロ自外陽ヒタチノウ小坐スモジいとくを表
すとえ作アサフ小坐スモジきりとある文ムニ文ムニ大納オノナ左衛門

トモシテアリトム先方の辞めをうなぐと前
途もまた也とぞひれけるもじてぞくらセヒリ
治承元年七月二日従事よりあくまむるに因十三
日師の大納言^{スル}トノ新御^{スル}とて若小豆傳^{スル}ト
大御の度^{スル}と見^{スル}うし小豆のじきれくよ
サ房わつて^{スル}と頻^ハあくとあくとゆくと向^スの
よかのりやうあれ^{スル}とやこうはりよと相^スの
うきをありぬすゆくいぞやひきのれりも^スの
又稱^スうきをあがむ向^スやうて^{スル}とぎりもれわね^スを
次月八日^{カニ}小糸^{スル}とあ大納言^{スル}御細別^{スル}と附^{スル}と

かうりて^{スル}きりと敵^{スル}とひきうれ^{スル}れどもいとお引
ひきうりうりと敵^{スル}とて國人の多^シ還^{スル}わたりと御細別^{スル}と
のうりを^{スル}と御院のゆともかくす^{スル}御亮重^{スル}御食^{スル}
うひもそ^{スル}と作^{スル}と見^{スル}とあぬを^{スル}と一日^{スル}と見^{スル}と
産^{スル}御^{スル}やせられうり^{スル}と十日^{スル}と育^{スル}平^{スル}と見^{スル}と還^{スル}
き^{スル}御^{スル}がの多^シととせえほなる治承に半^{スル}秋^{スル}と
伊豆^{スル}の流人^{スル}と吉^{スル}島^{スル}と御^{スル}御^{スル}謀^{スル}及^{スル}とみを^{スル}
追^{スル}付^{スル}御^{スル}御^{スル}御^{スル}と御^{スル}のち^{スル}御^{スル}參^{スル}と御^{スル}御^{スル}
お^{スル}御^{スル}方^{スル}が^{スル}も源^{スル}の^{スル}御^{スル}御^{スル}御^{スル}とひきれど

遷侍従の前道よりよりふきりかゑの程よ世の中を
づくあさりきれど十一月廿日新涼の夜上ゆく東宮
えりす御代とて御の内門を出候る御隠教
大納戸大納戸^{治方}の事^{長方}并年れりきり乃年
御房御内縫^{ミタマ}のひの城を身を乞ひて御内縫教
えりてヤケツルひとよで身乃御政漢高被孫^{ヒロシ}に
五年中よ五將門^{ヒカル}謀反^{ハサウエ}御降^{ハタク}を破於今度ハ是
月の甲子十日御内縫^{ハサウエ}改義^{ハサウエ}行^{ハサウエ}免之^{ハサウエ}也
ははは是代帝生父祖也^{ハサウエ}御内縫^{ハサウエ}天下^{ハサウエ}元^{ハサウエ}可^{ハサウエ}
令政勢^{ハサウエ}又入通室^{ハサウエ}御内縫^{ハサウエ}思ふ可^{ハサウエ}讓^{ハサウエ}也

幕^{カサ}下^{カサ}アリキ^{カサ}と竊^{カサ}はゆく^{カサ}これ^{カサ}爲^{カサ}アリ^{カサ}れ
他人^{カサ}も^{カサ}御政^{カサ}と^{カサ}も^{カサ}か^{カサ}た^{カサ}む^{カサ}ぞ^{カサ}や^{カサ}れ^{カサ}御政
あり^{カサ}か^{カサ}き^{カサ}が^{カサ}り^{カサ}はは^{カサ}是^{カサ}年^{カサ}のそ^{カサ}う^{カサ}改^{カサ}み^{カサ}は
を^{カサ}下^{カサ}ゆ^{カサ}な^{カサ}れ^{カサ}せ^{カサ}ま^{カサ}一^{カサ}ハ^{カサ}也^{カサ}が^{カサ}平^{カサ}政^{カサ}入
道^{カサ}の^{カサ}達^{カサ}り^{カサ}か^{カサ}け^{カサ}り^{カサ}を^{カサ}た^{カサ}か^{カサ}わ^{カサ}く^{カサ}そ^{カサ}れ
も^{カサ}れ^{カサ}る^{カサ}ゆ^{カサ}が^{カサ}死^{カサ}り^{カサ}て^{カサ}ひ^{カサ}も^{カサ}お^{カサ}う^{カサ}く^{カサ}そ^{カサ}れ
き^{カサ}が^{カサ}る^{カサ}ゆ^{カサ}が^{カサ}死^{カサ}り^{カサ}て^{カサ}ひ^{カサ}も^{カサ}お^{カサ}う^{カサ}く^{カサ}そ^{カサ}れ
向^{カサ}す^{カサ}お^{カサ}入^{カサ}下^{カサ}も^{カサ}び^{カサ}ん^{カサ}れ^{カサ}ゆ^{カサ}う^{カサ}御^{カサ}改^{カサ}め^{カサ}き^{カサ}

公率^{カサ}才^{カサ}は

西^{カサ}御^{カサ}改^{カサ}め^{カサ}う^{カサ}除^{カサ}の^{カサ}追^{カサ}従^{カサ}か^{カサ}る^{カサ}ま^{カサ}だ^{カサ}れ^{カサ}る^{カサ}の^{カサ}御^{カサ}改^{カサ}め^{カサ}

あづむをこかへまくを伏まつてよきれり。凡て御時
れ大半西へれりや山おどりてモ無後よそへるわ
御多み事のあらゆる處實ものうつめおもくねる
多氣のゆよびへは今ハ後すじよいがと幸なり
宇摩御使はすましく後統通時時の御者常人
と縛りうきの附子のうりふを取れりて居ますり御
団車小車で又御あざる代人長着附通とたぐれを
あらわの人の足あせを脚かといひひうる事多ひ是を
之を仰りき。

一条院御附御者車との賄給よハあざむに起居室

きく川老店舗上人主ておひきあう所是不難とて
ておれいぬとのまの立都よりして輶をたる原是ま
くりとお年く暮人よ々せんじれをあうす。嗚呼
おれうきて起居やざきれり

万治二年端おおき含小吉大臣矢ゆく陣は付く
宣奉見事とお詔を仰る入侍をさるか二侍の宇ね
附居に伏おきかゞり大納言參侍に鑿碑をせられ
ぐ人を遇みあそびり植大納言が威令の大納言
扇よもぎて卧肉よしらかれて屬よもさんお
名前よもすきりけるゆもす县少お隣御居

わいくか扇よりくぐりきれどいえどと
まうきれどもやうやうと相あきさう伏承にゆく
うふきりもよもようやうめまゆうりきれど
かほせせのへりひき

うぬ太納云隆也にけねまわらぎる年賀時の際
はうまじるをむとむれど後まつて紫葉
うりとば景ひきがひて御序ふまれうきうたう振
ゑち式とりしてはる成キアリキれどまわ
ぐくかとやうくみかとわられぬそり

いつの年から白る首參小進士別後着御珍重

うきはよ難化きどもくわからんかられもらうもうう
捨船邊便ごも退出せんとくまかう西行ひともの間
専徳と見あらうあるまうのうりあひとわくと改仲
がよかとりてあらううてまじきう細よもとおはせゆ
けの専徳もさうあるまうのうりて支那とうかす
ともりと昨のうり城をあらひをやひと幼
うきうのうもとひづれうきう寂感わうて女房
れ衣絶ゆぬつせきうわん

寛治八年四月二日あの時密をうしたるをなす
右吉田内官(後)房(後)房(後)房(後)

三云也よりて第1まいひきりゑ下た有臣房府生下毛
聖教久嘗有私益奉為持す惑難城南隣のあふて
西兵とねまえへありせきり肉食官守被去中おなぞえ
もくみくら跡とれおめめらわあほひとくがうり生
えれそり中納言をけぬつてくこうて内筆納とば教久小猪
才良やハ聖教久呼を先就わまとも附ふのども
御内ゆ一ノ子でゆきり沙よ中氣拂方陰附寄よん
無病きり罹る系祖源がごとく教事引隸褐毛の弱
かどれ河口びきり倒解れ真と死にちくやむん久安三
年十一月廿日生の書名肉身肉身とつとも爲へ重ん

まく勝宣とあらねは嘗て始大命記められたり近頃
六爲久嘗すアゲヒシテマサシモメアリキリ祐子大毛
あさりのまくらや一後よおとく久安と先とく感ド
まくらゆとおん

大平元年四月一日院務札をきり八条左政大臣七
十二手をすらまくらゆとくり一とび移一てすすへ移
し終ひきりひきり經紀よりくまんとくや四二年毛を
又くらゆとおん

不家は平正月一日由元旅は賀場河左毛の二院兼
役し終ひきりひきり一とび室治元年院務札よ後久

内裏へ弘た年中よもやうを心がちえりうなご
てあとあられど傳えます官員す有ふれりあれり
さきまくらもむらがれも有ふあうてお育ふわとか
きくうひ骨の本をかたわと本筋でめぐれりうけ
性もあ寧白とてかくもふとちくとくんがく
ありあひうきそんあをひたてへあくびとてまく
がりきうをぬちほの後経のまよせりくそくもあう
まくふ度おうちあううれびゆくまくやうてき
とくみよおぬちほりとほくがまほじよもくみやえ
どもあ下ゆりあらうきうつあふあたぬだ居

卷之三

卷之二

あくとまほ被拂ひてまく後を敵たるへ
て在りまひうらうとせ也

帝の寵人主婦大敵主軍たる柏子教内アガサ所アガサに案

はす連理アガサの方をす隣季アガサ節アガサ工縫アガサ小主アガサ羽衣アガサ

笠アガサ衣アガサの賛嘆アガサ相アガサ取アガサ前アガサ御アガサ後アガサも聲アガサ葉アガサ集アガサ

主アガサと侍アガサ付アガサすゑをきり玉アガサぞぐれアガサてアガサあアガサゆアガサ安アガサあき

支アガサ脅アガサ面アガサ一アガサ契アガサ取アガサ高アガサ尋アガサ海アガサ万アガサ家アガサ系アガサ主アガサ御アガサ

多事アガサ余文アガサ家アガサからアガサとアガサそアガサそアガサ舉アガサされ多事アガサ林アガサ大アガサ鹽アガサ物アガサ周アガサ光アガサ

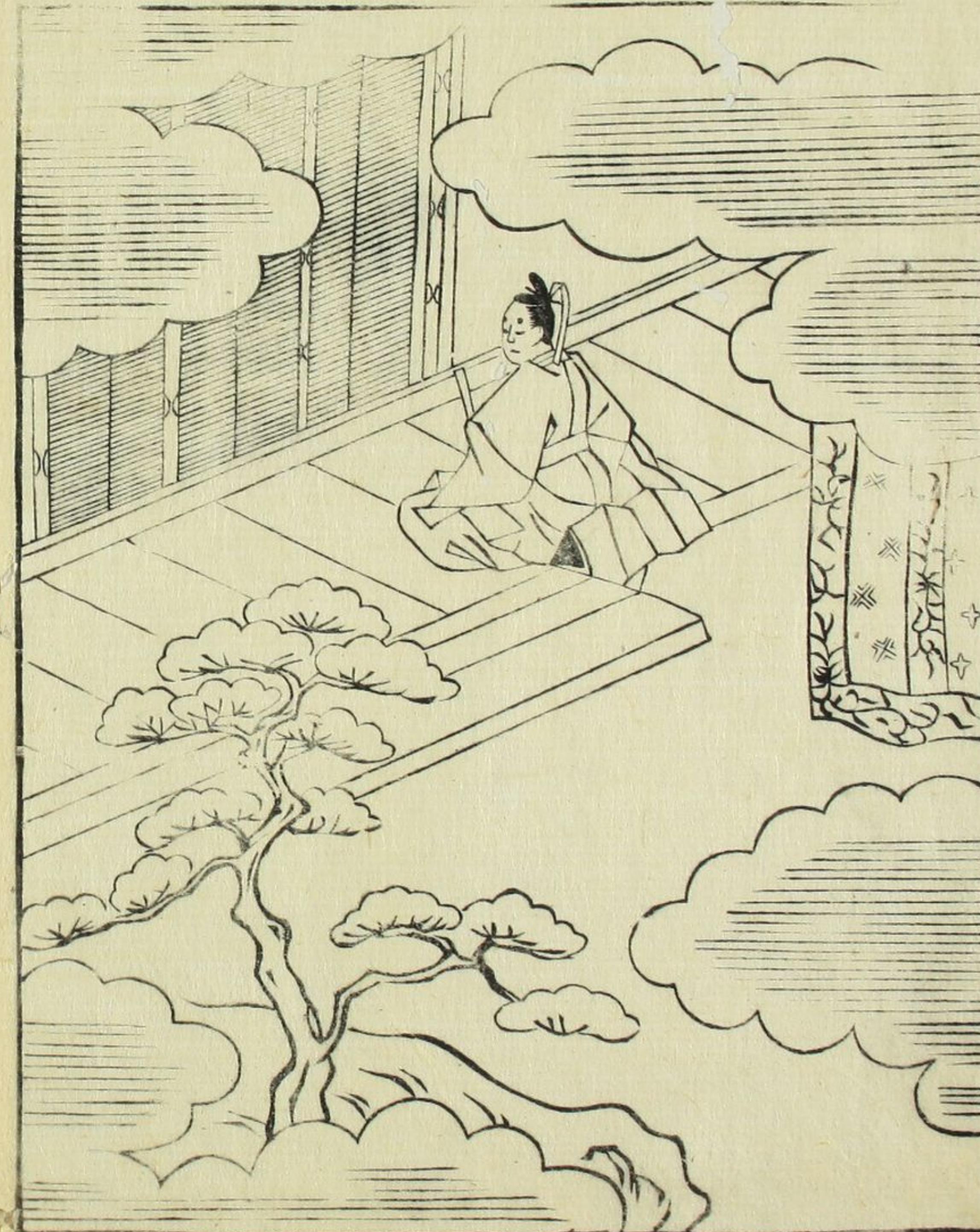
ハトモジの御事アガサ主アガサのけよと多事アガサとアガサのゆアガサとアガサあ

アガサと多事アガサとアガサのゆアガサとアガサあ

の多まゆびのゆねとて切りあらうされは主上真
よへせあり内きり拂衣樂坐成閑て聞く唱がせれ
どう與わうすく永曆うりあそひれを拂ふけをうち
おこまへ

後向の泥流慈利行よ前代の富よつせありま
とうきはよ雲司松煙とつて山あふねまうすり
花鹿に府冲山を改入道後も兩右大翁かて山あふけ
りせのまうきはふかまうじのめぞくもとを勅室玉
氣れどもとおたねよそくめやされれど根どりとて
手とそりてもとせのひきりその根餘骨の拂葉れま





故きりて有るまでもとあつた感歎のきりのさう
遠々の宵月帰へた後拂拂^{せんく}身^みもとへりられを
終^す近代^{じだい}言^{こと}ふたむと金^{かな}もとくらねるのそれまき
よそかうむゆゆゆくにまきこみを西^に二条を度^と入
たの角^{かど}兵^{ひょう}の附^{つき}下^さうてめぐらひとをくら^{くら}候^{まわ}者^や
のへぬとれきばやうぞやんとやちきれきん候^{まわ}人^{ひと}氣^き
田^た地^じ成^な食^くせられゆかよ前^{まへ}兵^{ひょう}うづくまうて冬^{ふゆ}を
すくも雪^{ゆき}中^{なか}も葉^はの生^ながんと背^せの向^{むか}てのせ
ききりとおとへらのそをえほとめく角^{かく}兵^{ひょう}さくうれ
ゑれかの風^{かぜ}とゆきとどかくとまゆふるよし

卷之三

建久の年中より敵へ逼へて御衣を身にまといて顯るに
二年も経たまゝもさへ暮文暮文の統そうとあつてはと
まひきうほんへ、あそぼりの一かく、今ふくせき
うちきりとやけねいゆくを、餘事餘事ふりんわ
弟元武元武、大前大前の日、京官京官に在あれ多忙多忙、或大病
を患患難難すの爲爲め、かふされたり、家と妻夫婦の事事又
遺失失失津津地地を失失ふ、一暮暮と身身を失失ふの爲爲め
かづく爲爲め、死死ぬる處處を失失ふ、也也かく、あくまでもううるを

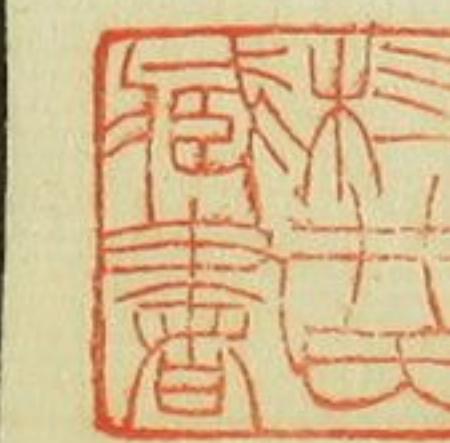
ぬまへよき處へくやみあうすれは身あくわづは國を
なはせ事めかと時の人々をもとめん海をも想ひ入らぬ
下木内矢の船をさりておりまえとて跡に風ふ
御事あらう門へれうまえれうち入彦東下毛櫛の
笠衣をぬよ勘定ごくくそひのゆ下まの庵とみ
くせびく御機よやくゆきをもまそて新をもひう
き肩見ももむれまうぐめでごうるきあがふあこゑ上
人三人上山中^{カタシム}すみ浦御下人ぞひきる
後多頭院のそへん大内よ岸をさりて向ふ御食乃
號乳子をさり流へ大内の主おとえ内番と傳ふあるを

おり。坤きり官人坊の大納言が傳教院の事務
をめぐらすやうなる者たれど、後久我を歴史に記す
を爲よ蟲をかへ造酒而伝久我をこれうせり大納
言は後久我かへくあゆりてうきろ紙と翁を足て陰陽
おほきれくじうりとあやうやうつわいとれど、酒をひ
ほまにそよれどつむろう居てと興五年と八月の事ぞ
ノノ身の弱ふる事多きとて下を穿りうてあ
もくらをとくあゆく坐りきとよ跡よつまきと筋に纏
すとれどひうをとく

天正五年五月十七日肉裏やく書密れあき玉

大納言へ前半あまの中ねやくおりはまんまと取
事もきくらも小篠藏皆その人休室アキヤマの主と
の私主めでありはまん屋を起きてわざせまひき
やまむりにせまわづともけりかくや
頃御代の所仕の財賜らとまひづれぎりた氣を重々
長納言ち仕のまえ抱とくして白木代山崎
みつて主上の御まどとぞとあきの財をだまると又仕
とせゆきの室向ふかくわざりとおだや下階至
人とぞあされまくまお下山崎ふつまくはがく
そのえとて断ふ并もの河をとくとくとくとくとく

事處は奥の本なりきり猪負舞と譽も少聞至る
ひ者邊一鼓とうら畠人者附大般と打きり廻ての景
みえむとくべそばをかみ猿樂の黒白ゆておう廻
きゆ光樂をむへたゑれを食ゆくおう一は爲すに
抑うて余をあひく出だせられまほう弱也出雲舞
ゆのるありきりゆうちじの後ひよきに至て主上の
内事よりくゆべつべ利倉もろ牛柳くやく連鑑正
て猪奈光親にとづくひそめ盡くやこれうるまへど
とくべくぢりきりむすん



古今著聞集卷之三

